

巡検報告

上野原巡検（9月13日）

夏休み明けの9月13日、私達は地理科1年として初の上野原1日巡検に参加した。各自“巡検とは如何なるもの？”とあやふやな見当をつけながらも全員参加となったのだった。この巡検の目的は1) 地図に慣れる、2) フィールドスタディの始めとして、ということで始終2万5千分の1地形図を片手にルートを書き入れ、実物と地図記号との照合確認、ルートに沿った主な建造物の通し番号による記入などを課せられたのだった。途中新たに地図記号について学んだりクリノメーターを使ってみたりしてそれなりの収穫はあったように思う。

上野原町は山梨県の最東端部に位置し東京都と神奈川県に隣接しており都心からそう遠くない町である。巡検前の式先生からの御説明では大別して2つのポイントつまり河岸段丘についてと甲州街道の宿場町として江戸と甲府を結び郡内機業の中心地であったことが挙げられていた。自然、人文両地理学を学ぶ材料が揃っているという点で（適当な言い方ではないかもしれないが）この町はまさにフィールドスタディの始めとして訪れるにうってつけかもしれない。

上野原駅前相模湖西端部を中心に左右に広がる段丘の中段位に当たる段丘面上にある為バス一台の長さの道幅しかない狭さでその上段丘崖が真近にそびえそこにも斜面を利用した建物が建っている。上の段丘面に移動してから反対岸の小学校の大ケヤキから段丘を確認したり、三等三角点のある段では水田や住宅化されている様子を見た。

310mの最高段丘では関東ロームと同類と思われる褐色火山灰土の厚さ3mの層を観察し下の段に移動する際、下の段丘は殆ど砂礫層だが上位段丘ほど厚く火山灰の堆積層が見られることがわかった。この様にいつも段丘の確認をしながら進んだ訳だが堆積段丘である為、段丘面が平らで高さの対比が容易である。またどの段丘面にも集落があり水田化されているのは上流部での土木工事の結果である。このような資力とまとまりこそは上野原町自体によるところのものだろう。水といえばまさに上野原は水路の町だった。町中網の目の様に地下まで水路が走り実際水路沿いを歩くことが多かった。また上水道も見学したのだがこの水の恩恵を受ける部落は広範囲に渡って分布していることがわかった。

石畳みの名残りを期待して旧甲州街道を歩いたのだが道端の茂みに隠れた少しばかりの形跡を認めるのみだった。しかし郡内機業の中心地だったという通りに養蚕農家を見かけたし、それとは対照的に現在の上野原産業を物語る中小工場が山の上まであるいは桑畑の中などに点在しているのも見た。今や都心から遠くないこの地に農村の余剰労働力を見込んだ大会社の下請け工場が、あるいは若年層の勤務先を地元確保する為に誘致された新企業が変化をもたらした。甲州街道の脇本陣をはほそのまま残す古い旅館での話や拝見した物が昔を物語り今昔の対比感とでもいうものが一層私の中では強まったのだった。

（式教官指導 2年 反町純子）